

博士学位請求論文審査報告書

氏名 長谷部亜子（愛知学院大学大学院研究員）  
学位種類 博士（文学）〔甲〕  
論文題目 日本語空間名詞の研究

1. 本論文の内容

(1) 本論文の目的と背景

本論文は現代日本語の相対的空間名詞といわれる語類の、適正な意味的・統語的記述を目的としたものである。近年の認知言語学の隆盛に伴い、ここで扱われる語類の多義に関する記述は、比較的盛んに行われている。そこでは比喩を動機付けとした意味派生について記述は割かれるものの、多く解釈論的な意味記述に留まり、各義が顕現する際の統語的条件に意を払わないもの、あるいは記述は行っても不十分なものが少なからず見られる。

一方、ここで扱われる語類の、形式名詞としての用法や複合助辞化したものについての統語的分析の蓄積もあるが、なぜそのような意味用法を獲得したかについて、意味論的な動機付けが乏しい記述も少なからず見られる。

本論文はこの両者の欠点を補い、それぞれの研究の良い面を継承し、数万に及ぶ実例データを丹念に読み込み、適正な意味的・統語的な記述を試みている。

(2) 本論の構成と内容

本論文は、序章および第Ⅰ章～第Ⅵ章、終章の全8章から構成される。参考文献一覧を含め、A4版で約100頁から成る。各章の内容は以下である。

【序章】

序章では、上下に関わる和語空間名詞としてモト、スエ、シタ、ウエを取りあげる理由を述べた後、ウエの関連表現として接続詞コノウエとソノウエを、モトの類義表現としてナカを、考察対象とする理由を述べる。モト、スエといった上下空間名詞を取りあげる理由として、それぞれの語が上代からすでに使用され、各語は歴史的に様々な比喩的意味を派生させて現代に至っており、その多義構造を明らかにすることは意味論的に有意義であるからとする。続いて、本論文を通じ、どのような観点から分析を行うかについて述べている。各章における分析はすべて実例に基づいている。用例の収集方法は各章によって異なるが、分析は、意味的、統語的観点からバランス良く行い、必要に応じて認知言語学的な観点を取り入れていることが述べられる。

【Ⅰ章 モトの多義】

第Ⅰ章では、モトの多義を扱っている。モトは空間的意味と時間的意味があることが知られている。しかし、モトの多義全体を見渡すと、空間的意味なのか時間的

意味なのか説明できないものがある。本論文では、モトのすべての意味を統一的に説明するため、「プロセス性の有無」という観点を取り入れている。モトの意味に關与する「プロセス性」とは、実際のプロセスとは逆方向の、時間的にプロセスを遡るという意味で用いられる。時間的に遡るプロセスを含意するかしらないかで、前者をプロセス用法、後者を非プロセス用法と捉えなおし、これによって多義を分類、整理している。これにより、空間的、時間的といった説明では統一的に記述できない意味用法も説明している。

## 【Ⅱ章 スエの多義】

第Ⅱ章では、現代語スエの多義構造を、上代の意味をベースに据え、明らかにしている。第Ⅰ章で、スエの対義語モトの意味分析の際に「プロセス性」を含意するかどうかを問題にしたが、スエの分析においてもこの観点を取り入れている。スエは、どの意味においても対象となるある事物や事象の＜最後＞の部分を目指す、上代においては空間的最後（物理的最後）であるか、時間的最後であるのか、といった観点からのみで分類できる。しかし、現代語では、計 11 種の意味が確認され、空間、時間という用語のみでは説明できない。＜物理的最後＞の下位類として 3 種、＜時間的最後＞の下位類に 3 種、そして上代にはない＜概念的最後まで＞に分類される意味も 5 種ある。このうちのほとんどは時間の経過に沿った「プロセス性」を有している点で共通している。モトが上下の概念を生かし意味を発達させたのに対し、スエは意味の成立に際し上下の概念が關与しなかったようである。一方で、プロセス性（モトのプロセス性は時間を遡るプロセスであり、スエのプロセス性は時間に即したプロセスである）という点からは、スエもモトもプロセス性を活かした多義が認められ、それぞれに独自の用法を展開していることを明らかにしている。

## 【Ⅲ章 シタの多義】

第Ⅲ章では、モトと類義關係にあるシタの多義の分析を行っている。シタとモトは、ともに「下」と表記し得る点で共通する。シタは、4 語のなかでも多義的区別の少ない語であることから、本論では、シタの意味分析も行うが、その分析の成果が「X の下」という場合の「下」の読み分けにどのように現れるかという点に絞って分析を進めている。このため、本章はシタとモトの類義語分析であるとも言える。「X の下」という場合、前接名詞 X の種類によって読みが決定される。一般的には具体的事物についてはシタと読み、抽象的な事象に対してはモトと読む。この前接句の特徴は、第Ⅰ章のモトの分析結果にも対応する。ただし、「X の下」の「X」が「人」や「木」、「天体」といった具体物の場合に、どちらの読みもあり得、その場合も後続文脈との關係性によって解釈が異なり、読みが決まる。この両語の読みわけに関しては、文体的な違いも考慮する必要がある。シタは、第Ⅳ章でとりあげるウエの対義語でもある。ウエが形式名詞や複合辞といった抽象的な機能を表す用法を複数持っているのに対し、シタには、そうした抽象的な用法がない。基準より物理的に低い位置を指したり、表面に対し裏側の部分を指したりヒエラルキー中の低い位置を指すなど、基本的に位置關係を表すのみである。

#### 【Ⅳ章 ウエの多義】

第Ⅳ章では、ウエの多義を、意味的側面と統語的側面の両面から考察することにより、統合的に説明している。ウエの意味として、上下の概念が意味に反映されていると一般的には考えられている。しかし、ウエは多義化する際、上下の概念が関与するだけでなく、表面性という特徴が関与することがある。ウエは、物理的・空間的な意味で日常的に用いられるが、一方で、表面性や、対象物との概念的関係といった特徴が、形式名詞や複合辞といった意味に展開したと考えられる。この抽象的な意味も、特殊な用法ではなく、よく使用されるものである。そして、本論文ではこの抽象的な用法においても、すべて物理的空間におけるウエのイメージが、抽象的な概念空間にあてはめられた結果であると主張している。本論文では、意味的区別を、統語的側面からも補強、整理するが、その結果、意味的な抽象度の違いが統語的な制約の強弱と関わっていることも示している。空間名詞としてのイメージを形式名詞や複合辞の意味にまで応用し、そこに統語的な整理を加えたことで、より統合的な意味分析が可能になっている。

#### 【Ⅴ章 接続詞コノウエとソノウエ】

第Ⅴ章では、第Ⅳ章ウエの多義のひとつ＜累加用法＞に含まれる接続詞形式コノウエとソノウエの使い分けの議論を行っている。第Ⅳ章までは名詞を対象にしていたが、ここでは接続詞が考察対象になる。そのため、接続詞の前後に表わされる事態（前件事態と後件事態）に注目する。名詞単独の＜累加用法＞ウエの分析では前件、後件の事態の捉え方において、話者の視点というものに注目しなかった。しかし、接続詞コノウエとソノウエの使い分けには話者の視点から見た現在がどこに置かれるかという問題が関わる。また、その置かれ方によって各事態が既に成立した事態なのか、まだ成立していない事態なのかが決定されることを示す。コノウエの場合は、話者の現在は、前件と後件に挟まれる形で出現する。このことを、第Ⅴ章で前件が已然事態、後件が未然事態と把握されるという根拠をもって説明する。さらに、ソノウエの場合は、前後件が未然事態同士か、あるいは前後件が已然事態同士の場合に選択されることを指摘する。

#### 【Ⅵ章 類義表現モトとナカ】

第Ⅵ章では、モトが副詞的用法となる際に、ナカと類義語になる（「厳しい状況のモトデみんながんばった」と「厳しい状況のナカデみんながんばった」のように類義関係になる）ことに着目し、両語の意味的な違いや表現効果の違いに関する分析を行う。両語は、このように同じ文脈で用いられる場合もあるが、統語的にみて、顕著な好みの差が見られる。モトは前接句に動詞句や形容詞句をとることを嫌う傾向がある。また、この用法の際に、後接形式も、無助詞か格助詞ニ、デしか許容しないことから、モトは名詞性よりも副詞性を帯びていると考えられる。一方、ナカは、前接形式、後接形式ともに比較的自由に語を選択することができるため、名詞性が強いのである。

## 【終章】

終章では第Ⅰ章から第Ⅳ章で考察した、モト、スエ、シタ、ウエの多義について、どのような特徴が各語の多義同士のあいだで関連し、新たな意味へと展開しているのか、包括的に考えている。また、第Ⅴ章で考察した接続詞コノウエとソノウエについてはその分析結果の応用例として、直近の研究成果についても触れている。第Ⅰ章から第Ⅳ章でとりあげた4語について、各語は、ある意味においては類義語であり、ある意味においては対義語になるという関係がある。終章における考察の際の観点のひとつめは、上下の概念（空間的な意味における上下という概念が、さまざまな認知領域に写像されることはそれまでの議論で述べている）が意味の背景に認められるかどうかである。ふたつめは、プロセス性の関与である。プロセス性についても、それまでの考察で主張したものであるが、これはモトやスエの多義の展開に大きく関わる。さらに、このプロセス性が、ウエの複合辞としての用法にも適用されることをあらたに指摘するなど、4語の意味特性を表の形で示す。みつつめの観点には表現性を挙げ、よつつめの観点に、時間そのものを指す用法かどうかという点を挙げる。このような観点を設けることで、こういった意味特性で各意味同士が関連し類似した意味になるのか、または対義的な位置に置かれるのかを示している。

本論文末尾に、本論文を構成する、申請者の既発表論文の一覧を載せている。再掲すれば以下である。

### Ⅰ章 モトの意味分析

「多義語モトの意味分析」(2010)『表現研究』92号

### Ⅱ章 スエの意味分析

書き下ろし

### Ⅲ章 シタの意味分析

書き下ろし

### Ⅳ章 ウエの意味分析

「多義語ウエの意味の分析」(2013)『日本認知言語学会論文集』13号

### Ⅴ章 接続詞コノウエとソノウエ

「接続詞コノウエ／ソノウエの選択要因とその優先順」(2014)『日本語文法』14巻1号

### Ⅵ章 類義表現モトとナカ

「モトとナカ ー副詞的用法をめぐるー」(2011)『表現研究』94号

### 終章

書き下ろし

## 2. 審査報告

### (1) 本論文の評価

既に1-(1)「本論文の目的と背景」で述べたが、本論文は認知意味論的な記述と統語的な記述、双方の特長を活かし、対象となる語類について、適正な意味的・統語的記述を行おうとしている。その際、実例に基づく数万のデータを扱い、一つ一つの例を丹念に検討することで、所期の目的を高いレベルで達成することに成功していると評価される。内容について、多少の修正を施せば、そのまま研究書として刊行して遜色ないレベルのものであり、審査員全員、高い評価を下すものである。

ただし上に述べた「多少の修正」が必要な箇所はあり、それについて、口述試験時に出示されたコメントを基に、以下、大きく4点にまとめて指摘をする。

- ①章と章の間の論の整合性
- ②用例について、多義の、各派生義の解釈
- ③図式、表の解釈
- ④統語的整理に関する浅深

第一に各章に跨がって類義語の意味を扱っているため、それぞれ関与する記述が不整合なところが一部見られるという点がある。既発表論文の発刊時期が異なり、考えが更新されていくという点からは避けがたい事ではあるが、一つの論文として纏める上では整合性を保つための修正が必要であると思われる。

第二にある意味タイプの事例として、ある用例が妥当であるか、ごくわずかではあるが、長谷部氏と審査員で見解が異なるものがあったという点がある。これもこの種の意味記述研究では避けがたい事ではあるが、ある意味タイプ1とある意味タイプ2を設定すれば、当然その中間タイプ用例もあり得ると考え、必要に応じて中間タイプの事例として、対応する用例を示しても良かったのではないと思われる。

第三に本論文では各章末尾に意味的統語的整理をまとめた表が示されていて、本論文の価値を高いものにしているが、各表について、結果がこうであったというまとめの意味を持たせるだけでなく、表についてのより深い解釈を記すと記述が豊かになったのではないと思われる。

第四に章によって統語的整理に関する浅深があると見受けられるという点がある。これも既発表論文の発刊時期が異なり、考えが更新されていくということからは避けがたい事ではあるが、特にI章について、統語的整理の記述量が少なく今後充実させる余地があると思われる。

以上のように指摘すべき点はあるものの、すべて論の根幹を揺るがすものではなく、今後比較的容易に修正が可能であると考えられる。

結論的にいえば、論文全体として、多義の記述、それぞれの意味があらわれる際の統語的条件の整理が、高いレベルで達成されていると判断され、学位授与に値するものだと認められる。

## (2) 今後の課題

本論文の今後の課題として、ウェブ上の公開時（学位授与後 1 年以内）までに上記 2－(1) で示した諸点を修正することが挙げられる。

次に他の相対的空間名詞や、それを構成要素とした語群について、新たなテーマを設定し、記述を推し進めて行くことが課題となる。長谷部氏には、学界に新知見をもたらすであろうその作業を遂行する十分な学識と能力があると判断される。

## 3. 口述試験及び語学試験の結果

### (1) 口述試験

2017 年 12 月 22 日、愛知学院大学栄サテライト教室で、本論文の公開口述審査を行った。16 時から 18 時 30 分にかけて、主として上 2－(1) に記した内容について、質疑を行い、長谷部氏からは納得のいく回答が得られた。

### (2) 博士候補者試験

長谷部氏は本学大学院博士後期課程 2 年在学時に、外国語 2 試験に合格し、博士学位取得の条件を満たしている。

## 4. 結論

以上の点から、長谷部亜子氏の本論文は愛知学院大学学位規則第 3 条 2 項により、審査委員一同、博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、本学位請求論文を合格と判定した。

## 5. 外部公開

本論文は、学位授与 1 年以内に、本学リポジトリに登録され、外部公開が為される予定である。

報告は以上である。

審査委員 主査 教授 多門靖容

副査 教授 杉浦正好

副査 准教授 高田三枝子

副査 東京外国語大学教授  
早津恵美子